

---

# ネレイシス戦記「名誉のためでなく」

ulysses

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネレイーシス戦記「名誉のためでなく」

### 【Nコード】

N8400X

### 【作者名】

Ulysses

### 【あらすじ】

魔術が発達した海洋世界ネレイーシス。わずかな陸地に存在する国家群は、襲いくる魔獣と戦い、領土や資源をめぐり争い合い、激動の時代を迎えます。主にミネルヴァ連合王国の軍隊を舞台に描く物語。ミネルヴァ連合王国海軍哨戒艇 H・M・S・フラウンダーの男たちの任務と戦闘、愛、陰謀と、生き残るために戦う航海を描く予定です。

## 第001話 遭遇（前書き）

私の好きなジャンルの海戦小説と、ファンタジーの融合を目指しています。

遅筆のため、更新に時間がかかりますが、気長にお付き合い下さい。暇潰しにでもどうぞ。感想、指摘などを頂けると、とても嬉しいです。

読んだ方に楽しんでいただけると、更に嬉しいです。

## 第001話 遭遇

聖暦1662年の穏やかな春の陽光が反射し、鈍色に輝く海原の向こうに、黒々と点在する小さな島影が浮かび上がる。巡航速力の魔石機関に特有の吐息のような動力音が、艦橋まで聞こえてくるほど穏やかな、午後の海だった。

世界を取り巻く大洋に、わずかばかりの陸地がそれぞれの国家を営む世界ネレイシス。波面をずんぐりとした艇首でゆったり切り分け進むのは、北辺に位置する比較的大きな国家、ミネルヴァ連合王国の海軍巡視部隊に所属する、木造の小さな軍艦だった。

ミネルヴァ連合王国は、人族のミネルヴァ王国、エルフ族のデイエナ王国、ドワーフ族のウルカン王国、獣人族のアレス王国の4国家から構成される連合国家である。かつては種族間紛争が絶えなかったが、聖暦1100年頃にミネルヴァ王国の主導で相互平等・安全保障条約を締結、連合王国となった。連合の提唱者であり、人口の最も多いミネルヴァ王国の王都ロンディニウムに各王国から王の代理の貴族議員たちが駐在し、毎年2回開かれる王国大会議に出席している。

全長105フィート、全幅30フィート、排水量195トン、乗員30名が乗り組む哨戒艇、H・M・S・フラウンダーは、その航行能力からトロール漁船の設計を下敷きに、軍艦として建造された「哨戒トローラー」だった。姉妹艇の中には退役後、民間に払い下げられて漁船に改装し直され、文字通りの「トロール漁船」になった艇もいる。

艇上では、午前直から当直を引き継ぐ慌ただしさも収まり、ゆるやかな時間が流れていた。

「領海の北東端、オングレス諸島だ。そろそろ、転針の頃合いだな。」

「規定より長めの黒髪が微風に揺れるのを感じながら、ディラン・シアーズ少佐は、傍らで当直中の新人、士官候補生ティム・キャニングに黒い瞳を向けた。

この哨戒艇のような小艦艇では、航海師などの専任職が配属される事も少なく、たいてい皆、いくつもの役職を兼任していた。若いキャニングも、航海師見習い、看護師見習い、司厨員を兼ねており、ディランも艇長でありながら船務科（航海）長、砲雷科長をも兼任している。今は、キャニングに航海術を仕込んでいるところであり、感応魔術を用いて星の光を集め位置を測り、風と海流を詠み、航路情報を更新し、艇の針路を決める術を教<sup>すべ</sup>え始めていたのだった。

「はい、今当直の予定は、3分後に取舵30度に転針、艇速15ノットで4時間直進し、再度取舵30度、リゴルス島をめざします、サー！」キャニングは勢い込んで、小柄な身体の上の、金色の巻毛を振り立てた。

「ちゃんと予習はしてきたようだな。しかし、予定はあくまで予定だ。針路上の情報だけでなく、周辺の情勢にも目を配るようにしておくんだ。それと、少し力を抜け」

ゆったりと蛇輪をにぎり、リラックスして士官の会話を聞いていたオベド・オクリーブ操舵長は、ドワーフ族特有の岩のようなあごをゆがめ、微笑んだ。見るからに頼りないひよつこだが、候補生はいつも一生懸命で、ライオン種の獣人族の割に優しく人柄もいい。もう少し筋肉がついて、このまま苦勞を忘れなければ、いい士官になれるだろう。あくまでも、挫けなければ、だが……。多くの亜人族の軍人は、どれだけ有能であろうとも、やがて軍の体質に失望して捻くれていくものだった。まったく、人族の偉いさんつてものは……。そこでディラン艇長に思いがおよぶ。あの人は、特別だ。人族はもとより自分のようなドワーフ族からエルフ族、獣人族、果て

は魔族と人族のハーフまでもが寄せ集まったこの艇を、まとめあげている男。いや、不思議でも何でも無い。親父さんには、偏見が無いのだ。目をみれば分かる。自分よりだいたいぶ歳は若い、親父さんと呼ぶのがしつくりくる。オベドは、また微笑んだ。

「……はい。あの、艇長、それはどういう事でしょうか？」

キャニングが質問したと同時に、見張り員の鋭い警告があがり、思わずライオン耳がひよこりと顔を出した。

「右舷、赤20に大きな水しぶき！ 大型海棲魔獣、3頭！ ……直進してきます！」

ディラン・シアーズ艇長は、呆然と立ちすくむキャニングを見やり、疲れたような笑みを浮かべた。

「こういう事さ……。第一警報！ 針路変更、面舵10！ 砲術師、水雷師は戦闘配置！ 遠話師は司令部に報告　ワレ海魔三頭ト遭遇。阻止行動を開始セリ「日付・位置」！」

ストライパー  
善行章二本の一等水兵アンガス・バーンは、ベンチにハンモック袋を敷き寄りかかりながら、自分の王国である第三食堂　寝室兼居室兼食堂　を見回した。グリスリー灰色熊の獣人であるアンガスは、腕っ節一本で軍隊生活を送ってきた。歳とともに多少丸くはなつたが、自分の権威に挑戦しようという者がいれば、瞬きする間もなく畳んでしまうだろう。今、食堂仲間は手紙を読んだり繕いものをしたりと、思い思いの寛いだ時間を過ごしていた。

アンガスは、自分と同じく砲術班と闘術班に所属する黒狼の獣人、ゼッド・ヴォーティガン一等水兵に声をかけた。

「ヘイ、ウルフィー。お袋さんは、あいかわらずか？」

「ああ、グリーズ。察しの通り心臓と、自分の介護のために嫁にい

かねえ妹のグチばかりだ」二人の亡き父親も水兵で、母港のプリムゼルで生まれた時から近所付き合いをしてきたので、ゼツドの妹のポーレットもよく知っていた。兄とは似つかぬ、肩までの黒髪が美しい、26歳の優しげな美女を心に思い浮かべた。家族も認めた衛士隊の恋人との結婚に、なかなか踏み切れないようだった。「こいつばかりは、本人の意志だ。周りがやいのやいの言っても、まとまるめえ」酷薄そうな鋭い顔でぼそりと呟くゼツドだが、アングスは10歳下の妹が可愛くてしょうがない兄の強がりを見て取り苦笑した。

「ミスタ・狼<sup>ウルフ</sup>、プリム（ゼル）のいい医者を知ってますがね、お袋さんを診せたらどうですかい」二等水兵で人族のダミアン・ヘイが、革の半長靴を磨きながら口を挟んだ。この半長靴には足首と臍に連動した革のストラップと留め金が通っており、一引きで脚にフィットする構造になっている。

「なんてえ医者だ？ お袋は王立病院に通ってるが、治療術でも歳相応の回復しかできねえだろう」

「いや、俺の知ってるのはディエナ王国から来て、薬草や根を使って魔術無しに治療するっていうエルフの医者で、ベリル街の平民の間じゃあ、よく効くって評判なんですぜ」

初めて聞く治療法に、二人してほおと感心の息を漏らした。その時、

ウーガ、ウーガ、ウーガ！

警報が三度鳴り響き、それまでしていた事をすべて放り出し、皆食堂を飛び出した。アングスとゼツドは、通路に収納してあった自分の防盾をそれぞれ持ち上げ、砲術班の持ち場である甲板へ向かう。最後尾を走りながら、ニヤリと笑いあった二人の脳裏からは、医者もゼツドの妹の事も、きれいさっぱりと拭い去られていた。

「さて、仕事の時間だぜ」

午前直を終えたエムリス・ウセディグ大尉は、副長室で休暇の申請書、補給物資のリスト、傷病報告書、乗員の査定書などの様々な書類をチェックする事務処理を始めた。もの静かで決して動揺する事がない副長は、エルフ族特有の論理に重きを置く言動と、女性のような冴えた美しい風貌から、氷麗人アイスマンと乗組員から呼ばれていたが、嫌われてはいなかった。毎週末に行われる規則違反者に裁定を下す場も、公明正大で穏やかな態度から、反感を買う事もなく終了するのが常だった。

「グリーン兵曹、参りました、サー」

「入りたまえ」

ノックと共に丁寧な声がかげられ、副長の声に、小柄でずんぐりと丸い男が狭い部屋に入ってきた。筋肉の固まりに鎧われて武闘派という見かけのレナード・グリーン補給係兵曹は、修理班主任と司厨長も同時に努めており、艇の厨房を取り仕切っていた。

王都ロンディニウムのスラムで育った人族の彼は、10代の始めにギヤングの使い走りや荒事から社会勉強を始めて、数年後には若いながら組織の経営するナイトクラブの支配人を任され、その過程で金勘定や物資の調達の仕方、紳士的な態度などを学んだのだった。海軍に志願したのは、抗争に嫌気がさしたとも、暗殺から逃れるためとも噂されていた。

「早速だがミスタ・グリーン、キャニング士官候補生についてのメモを読んだのだが、厨房での彼の勤務態度に問題でもあるのだろうか」



「いえ、副長。候補生は、飲み込みは早いし手先は器用だし、文句などは全くありません。ただ、いつまでも下士官の私の部下に士官がいるというのは、少々変則がすぎるのではと」

「その点は問題ない。配属時に説明した通り、彼には事務方の勉強と航海術の勉強を、並行してさせている。事務の勉強の前に、食糧や物資などの消費と在庫の状況を学ぶのは、君の部下が最適なのだ。完全に理解できなくても、大まかな感覚がつかめればそれでよい。それまでは、君の作業を見させておきたまえ」

「了解しました。では、懸案の旧型戦闘杖の交換申請に關しまして」

その時、警報が鳴り響き、配置に急ぐ乗組員の喧噪の空気が伝わってきた。

「ミスタ・グリーン、修理班の指揮を執りたまえ」

「アイ・サー。失礼します、サー」

ケンジー・ランドール少尉は、目覚めたと同時に上体を起こし、下段の寝棚から両足を、勢いよく振り出した。この二人用士官居室は、ティム・キャニング士官候補生と共用している。上位の者は、寝棚の上段を使いたがるものだが、ランドールは有事の際の即応に配慮し、好んで下段を使っていた。

士官食堂の給仕が、革の半長靴の間に、起きる時間に合わせて出るよう調節され、保温魔法で熱さを保っている小型の紅茶ポットを挟んで置いてくれたので、私物棚から錫のカップを出し、紅茶を飲んだ。

枕に頭を置いた瞬間に眠りに落ち、目覚めると一気にフル稼働する彼は、いつも活気に溢れている。24歳の人族の彼は、一見する

と神話の彫刻のような美丈夫だが、よく見ると、どこことなく間が抜けた印象が強く、普段の気障な言動とあいまって三枚目として艇内で親しまれていた。

制服を着ながら、航海班の深夜当直までの間に闘術班員に課す訓練メニューを吟味し始めた。

班員は他の科との掛け持ちであり、半分は自分と同様人族、半分は獣人族だ。当直によりメンバーを分け、時間をずらして訓練しているが、獣人族は巨体が多く概ね打撃系、人族も体格には恵まれているが、獣人族程でないため、組技系の訓練が主体になる。

ふと思いい立ち、指を鳴らす。逆のメニューを課す事にしよう。目先も変わるし、攻撃と防御の選択肢の幅が広がるだろう。それは、負傷や殉職の可能性を減らす事に繋がる。そう結論すると、魔術で水を精製しカップを濯いだ後、舷窓から捨てた。

警報と同時にカップを棚に投げ、半長靴に足を突っ込むと部署に向かって駆け出した。

エルフォッド・ギルダン機関科兵曹は、直径10フィート、高さ6.5フィートの魔導ケトルを覗き込んだ。艇の動力である魔石機関は、取水口から魔導ケトル内に海水を取り込み、ケトル中央に配置された「メイルシュトロームの魔石」により渦巻きを発生させ圧力を上げ、艇尾の排水ノズルから噴射する事で推進力を生み出している。艇体の大きさからして、シングルノズルの仕様であり、最大25ノットの速力が出せた。

「メイルシュトロームの魔石」は巨大な大魔蛸<sup>クラークン</sup>が棲む、北極海に近いモスケネス海の大渦の底で採鉱される。最古の記録では、60

00年前から存在する事が確認されている、大渦を発生させるクラークの魔力が少しずつ漏れ出し、海底の岩に蓄積されたものだった。その魔力は海の生き物にも影響を及ぼし、魔獣に変化した海棲生物の巣窟ともなっているため、採鉱には危険が伴う。希少でもあるため在庫は国家が貯蔵していた。その使用目的はほとんど軍艦の動力であり、その他では一部の大きな収穫が見込める漁船の動力に限定されており、禁輸品として厳重に管理されている。そのため、その他の旅客や貨物など民間の船舶は、帆船またはガレー船が使用されている。

世界には何力所か大海魔の棲み家があり、その魔力を取り込んだ魔石の採鉱権をめくり、国家間で紛争が起こることも珍しくはない。北辺に位置するミネルヴァ王国は、領海内にモスケネス海を有するため、希少ではあるがその採鉱量は安定していた。

魔石に込められた魔力は放出され、崩壊していくため消耗品であり、いかに命令通りに艦を運用しながら長持ちさせるかは、機関長の腕にかかっていた。

ケトルの覗き窓から魔石の状態を確認したギルダンは、取水管の漏水チェックをしていた部下の二等水兵ターロック・エイルウィンに声をかけた。

「タリー、問題なければ飯を食ってこい。魔石の調子もいいから、しばらく儂が見とる」

「アイ、機関長。んじゃあ頼みますわい。今日の飯はウルカン風シチューだそうで、楽しみにしとったですよ」

「そうか、儂も早めに行くとするか」2人のドワーフ族の男は笑い合った。

ウルカン風シチューは、ウルカン王国東部の大森林地帯に群棲する大魔鴉を材料とする。肉の下処理に失敗すると、固い・臭いと悲惨な事になるため、ミネルヴァ王国ではめったにお目にかかれない郷土料理である。美味しいウルカン風シチューは、雉のシチューに似

ているという者もいて、人族でも狩人などには好感をもたれていた。また、この艇の独特の規則だが、機関員が全部で4名と人数が少ないので2名ずつの12時間当直となっており、業務に支障をきたさない限りにおいて、自由な時間に仮眠や厨房での食事がとれた。

ギルダンは、気配りの司厨長レナード・グリーン兵曹を思い浮かべて、側壁に掲げられた艇の全体図が描かれた銘板の、厨房部分を見上げた。

銘板には、艇の来歴も刻まれていた。

哨戒艇 H・M・S・フラウンダーは聖暦1651年、ウルカン王国の西海に面した交易都市ターラの、ボアーン川河口にあるクリドネ&エアムド造船所により、しなやかさと強靭さを誇るモンラック松材を使用し建造された。最も荒い海での操業を想定したトロール船の設計図が元であるだけに、過酷な環境でその実力を発揮するベツカーラーと軍用魔石機関により、非常に操作性に優れた艇となっており、ほぼ船体分の距離での旋回が可能である。ベツカーラーとは、排水ノズル直後に位置し、ノズルが噴き出す強い水流の向きを右、又は左方向へと変えることで船体の向きを変える舵板であり、後端部に「フラップ」と呼ばれる可動できる板を取り付けているものだ。フラップが最大70度程度まで舵角をとれるので舵の利きが良くなり、小回りが利くようになる優れた技術である。

トロール漁の際、片方の網を巻き取りながら他方の網を打つ事ができようと、ウインチ2基とクレーンが装備された、2連巻き取り船として設計されていたが、そのウインチは漂流船などを曳航する場合に、クレーンは補給物資の搬入や支援物資の陸揚げなどに利用するため、そのまま設置されている。

アトナ合金製のシエルターデッキ構造により、あらゆる海上で行動が可能であり、巻き取りウインチの制御は操舵室後方室内で行なうことができるので、荒天でもクルーが甲板に出る必要がない。

トロール漁で捕獲された魚は右舷前甲板のハッチより船内へ投入され、船体中央部の魚処理室へ送られる。冷凍魔術で処理され、氷漬けとなった魚は前部中央ハッチより荷下ろしされる仕様だったが、魚処理室は水兵の居住施設に改装されている。

軍艦として使用されている現在、部屋割りは、船長室以下高級船員室（1名収容×2、2名収容×1）は士官居住区、食堂は士官食堂、船員室（6人収容×1）は下士官居住区（第2食堂）、そして水兵居住区（第3食堂、20名収容）となっている。

ギルダンが故郷の都市を脳裏に浮かべ、ターロツクが厨房へと向かおうとしたその時、戦闘準備を促す警報が鳴り響いた。

艇首マストに交替で登る見張り員を見ながら、ジェフサ・ヘイワード一等准尉は隣に立つハーフェルフに、当直を引き継いでいた。ヘイワードは、苦勞のにじみ出た老人のような外見にもかかわらず、まだ42歳であった。

飲んだくれの父親が酒場の喧嘩で刺されて死んだ後、母親は隣家の妻子持ちと何処かへ消えた。10歳の何らの財産も持たない人の子どもだった彼は、身売り同然に貨物帆船の雑用係から船乗り人生を始めた。14歳の時、船長室付き給仕となった所で船主が破産。船を放り出された彼は、倒産の心配がない海軍に志願した。最下層の二等水兵からコツコツと昇進を重ねてきたが、望外の幸運だったのは遠視と遠話の魔術に適性があった事だ。

通信に携わる重要な部署に配属されしばらくした後、信号係としての勉強のため H・M・S・サムハム信号学校に派遣された。その甲斐があつて、今ではヨーマン信号手という准士官まで上り詰めたのだつた。

一方、インジルド・チエルディツチ砲雷科兵曹は、ミネルヴァ王国の農業の中心地サフォルトウシャーのオパニー村に、人族の農業の研究に来たエルフ族と、大農園主である村長の勝ち気な一人娘の間の、なに不自由ない環境に生まれた。知識欲が旺盛な彼は、世界が見たいという希望を抱いて海軍に志願した。父親が教師代わりに勉強を教え、使用人の子どもたちにもまれて育つたため、世間知らずな入隊時は高慢な態度で苦労したが、祖父のような滋味あふれるヘイワード准尉とは馬が合い、この5年間は暇さえあればヘイワードの経験談を聞くのを楽しみにしていた。

「インジ、今マストにあがってつたダグに気をつけてくれ。やつこさん、何か悩みがあるようだが、何も言わん。仕事に支障があつちや、いけないからな」

「了解です。でも、あいつは仕事はきつちりやる奴ですから、大丈夫ですよ。まあ、目は話しません」

話題の主、ダグザ・オエングス一等水兵は人族と魔族のハーフであつた。

人々に忌み嫌われる魔族と娼婦の間に生まれた彼は、生まれた瞬間から日陰者であつた。町の人々から存在は黙認されていたが、子ども時代から思春期にかけて人並みな扱いをされた事はなく、娼館の女たちのみが息子のように接してくれた。新たな生きる場所を得るため、彼が選んだのは海軍だつた。

彼は悩みを抱えていた。それは誰にも言えない悩みだつた。しかし胸を焦燥で灼かれながらも、任務をおろそかにする事はなく、遠視魔術を使い海原を監視する。

……、今、海面に何かが？

海中から躍り上がる複数の物体が、周りの海水を噴き上げる瞬間に、正体を掴んだダグザは叫びを上げた。

「右舷、赤20に大きな水しぶき！ 大型海棲魔獣、3頭！」魔獣  
はこちらに向けて突進しだす。

「直進してきます！」

## 第001話 遭遇（後書き）

いろいろと紹介回のため、回りくどくて申し訳ありません。  
筆力が乏しいので、努力して上げていきたいと思えます。



## 第002話 戦闘

砲術要員は、H・M・S・フラウンダーの両舷に、五名ずつ一列に並んだ。各自が防盾を、甲板のスリットに差し込む。防盾は高さ4フィートの長方形で右上部が四角く切り取られた形をしており、そこから魔術による射撃を行う。内側の持ち手横に収納されている、小杖戦闘用ロッドを抜く。

「火竜ドライク・トレイサーの軌跡、射撃用意！」甲板の中央に控えるチエルディッチ砲雷科兵曹が命令する。論理を尊び冷静な、エルフ族の典型でもあるウセディグ大尉と違い、人族とのハーフであるチエルディッチは、戦闘の興奮に頬を染めていた。左舷列の端からかかる、砲術班主任イアン・ストークス水兵長の「構え！」の号令に、一斉にロッドが突き出された。

戦闘用ロッドには火属性の魔石がはめ込まれ、ロッドには戦闘魔術式が刻まれており、意志を込めれば数種類の攻撃魔術が無詠唱で発動する。水属性の海魔相手に火属性では相克で打ち消されてしまふところだが、『火侮水』の効果でデフォルトで装備されているため、水の克制を受け付けない。有効な打撃力となるが、威力の大きさの順に発動から発射まで時間がかかり、術者の魔力も要る。強力な付加効果ゆえに、魔石の崩壊も早かった。

艇首にはウセディグ副長のもと、水雷班三名が同様に戦闘態勢をとっていた。当直の見張り員は、マスト上と操舵室の上両舷に陣取り、警戒を続けている。

「第二戦速、鼻先すれすれだ、操舵長コクスマン」シアーズは落ち着いた声をかけた。その引き締まった潮焼けした顔は、落ち着き払っている。「アイアイ、サー」上等兵曹はベテランだ。細かな指示は、却って邪魔になる。オベドは自信たっぷり、速度指示器を操作し面舵に

蛇輪を大きくとる。「おもーかーじ」速度指示器には微速、第一戦速（巡航速度、18ノット）、第二戦速（20ノット）、第三戦速（22ノット）、最大戦速（24ノット）、緊急速度（25ノット）と表示されている。艇が旋回しだすと、司令部への遠話を終えたヘイワード信号長がその間に、ノージエレン年鑑の希少種の項目で、初めて遭遇した魔獣のシルエットを特定していた。操舵室の窓とドアは開け放たれて固定され、速力が上がると共に吹き込む風に、ペー지가煽られている。

「スクイドワームです。最大体長35フィート。見たところ、平均25フィートほどです。速度は16ノット」シアーズはそれに頷き、伝声管で機関室に伝える。

「機関長、海魔三頭の迎撃だ。最大戦速も出さず」

「アイ、そんな事だと思いましたわい。いつでもどうぞ」ギルダン兵曹の声は、事情を知らせてもらい嬉しげだった。艇内奥深くの機関室では、外の状況を知るべくも無い。舷側が破られれば、逃げる間も無く海水の奔流に押しつぶされる。ギルダンは制御卓<sup>コントロール</sup>の出力桿を握り直し、魔力を強く流す準備をした。

「目標、右端の大きいスクイドワームだ。頭部に波状射撃」シアーズは伝声管を閉じ、操舵室のドアの外で控えるランドール少尉に命じた。

「アイ、サー！ 目標、手前の奴の頭部だ！」チエルディッチ兵曹が、ランドールの命令を復唱する。

海面を切り分け進むスクイドワームは、巨大な節足動物の胴体に、左右に大きく横に張り出した13対<sup>ついで</sup>の櫂<sup>かい</sup>に似た<sup>ひれ</sup>鰭を、オールのように動かして進んでいる。末端は海老の尾鰭のような尻尾である。頭部の上面には大きな飛び出した眼が3つある。顔面中央には、放射状に配列した歯に囲まれた丸い口があり、その周りには体長より長い3フィート程の太さの8本の触手と、餌を捕えるのに使われるコイル状の2本の外肢がある。さらに、6本の羽毛状の感覚器が頭頂

から突き出し、感覚器の集合体として敵を探る機能をなしている。今、三頭の内一番大きいスクイドワームが群れの右端で突出し、中型の二頭が体長の半分ほど遅れて進んでいた。

フラウンダーは右旋回する。オベドは取舵に10度当て直進とし、スクイドワームの触手が届かないぎりぎり前方を横切ろうと、艇を突入させる。標的が近づき、艇の左舷側に魔法陣が並んで出現した。ランドールが発射命令を出し、チエルデイツチが叫ぶ。

「射撃開始！」同時にストークスが曳光火炎弾を発射。その着弾点を目標として、次々と魔法陣の中心から火炎弾が発射され、撃ち込まれる。

魔獣の悲鳴が響き渡り、三回の斉射後、艇は離脱した。

爆炎が消えると、スクイドワームの触手は3本がちぎれ飛び、2本が傷つき、目が一つ潰れていた。紫色の体液を撒き散らし、苦痛に身を擦よじっている。

「もう一度行こう、操舵長」

「アイ、サー」冷静に会話をする二人を、キャニング士官候補生は呆然と見詰めていた。さつきから恐怖でこわばり、身じろぎもできなかった。士官学校で勉強したのに、対魔獣の戦術の授業では教官にも褒められたのに、何で身体が動かないんだろう。何である人たちは、あんなに冷静なんだろう……。その横をランドール少尉が通り過ぎ、反対舷へ抜け右舷砲術班に号令をかけた。

オベドは再度面舵をとり、艇を右舷方向に回転させると取舵に当たる。速度指示器を最大戦速に合わせるとジリリンとベルが鳴り、艇がぐんと飛び出す。

群れの前方に出ると、第二戦速に戻し更に面舵、大型スクイドワームの前方を目指す。中型スクイドワームは旋回する艇を追い、のたうち回る大型の右方向に引き離されていた。

「水雷班は中型の二頭を牽制。砲術班はもう一度、大型の頭部を狙え」シアーズの命令を、ランドールがウセディグ大尉に伝えると、艇首の副長が敬礼して了解する。

「……あ、あの……どうして、もっと強力な火力で攻撃しないの……」やっと声が出て、状況を記録していたヘイワード信号長に聞いた。

「でっかい魔術は、発動に時間がかかるでしょう。術者の魔力も必要になるし、魔石への負担も大きい。ドライグ・トレイサーなら、ほとんど刻印術式と魔石の魔力で発動できるので負担も少ない。長時間連射しても、魔石の劣化が少ないし……。まあ、いろいろあつて節約、節約でやらなきゃならんのですよ」と、苦々しげに表情を歪めるが、丁寧に答えてくれたが、その内容に困惑する。そんなに作戦の幅を狭めるほど、軍の内情は厳しかったらどうか。軍費は国家予算の、結構大きなウェイトを占めているんじゃない……。いや、今はそんな事、考えている場合じゃない。一部始終を、記憶に刻み付けなきゃと、ぎゅっと、両手を握りしめた。

ウセディグ大尉は、水雷班の三名に標的を指示した。

「ブラッケー等水兵とファレリー二等水兵は奥側のスクイドワームを、私とカンモー二等水兵は手前のスクイドワームを攻撃する。水竜（イベント・レイシ）の赫怒用意」四人は水属性のロッドを構えた。水の魔術式に遅発性の冷気と風の属性を加え、艇首直下の海中に四つの魔法陣が並び、艇が滑るように進み、重なって見えていた二頭のスクイドワームが個別に見えた瞬間、「発射」とウセディグが告げた。

海面下に四つの水塊が形作られ、錐揉み状に回転しながら二条ずつの航跡を引いていく。向きを変えようとしていた二頭の横腹に水塊が激突し、衝撃で胴体がくの字に曲がる。瀑布のように噴き上がり崩れる水塊は霧状となり、付加された冷気と風魔術が瞬時に発動。雷球が発生し、轟音とともに弾けた。海水に電撃が吸収されるため、

中規模の攻撃魔術の割に殺傷力は減衰している。だが、打撃力を加算する事でダメージ総量を増やし、一時的に行動不能にする事はできる。麻痺したスクイドワームの、動きが鈍った。

三系統の属性を混合した高度な術式の、冷気と風の属性付加は魔力使用量も大きく、自前の魔力を使用したためチャージする時間を必要とする。水雷班の水兵三名は盾を構え、防御態勢で待機に入っていた。士官は盾を持たないので、大尉は背で手を組み状況を観察している。

艇は、傷を負った大型スクイドワームの前方に差し掛かる。チェルディッチの号令で、右舷列のアンガス一等水兵が初弾の曳光火炎弾で教導し、次々にスクイドワームの頭部で爆炎が上がる。更に2本の触手がちぎれ、残りは傷ついた3本とコイル状の2本の外肢となった。その時、スクイドワームが尾を振り上げ、海面を叩き始めた。

海面が沸騰し、煽りを受けた艇尾が持ち上がりノズルが露出した。オベドが速度指示器を微速にする。機関に無理な力をかけないためだ。乗員は、必死で手すりにしがみついた。泡立つ海面に推進力が中和され、行き足が止まった。

「防御！」ランドールが、後甲板に待機している修理班に叫ぶ。彼らは、防御も担当している。主任のグリーン補給科兵曹が「障壁展開！」と部下に号令する。砲術員が構えた盾の表面に、緑色に光る障壁が現れた。そこにスクイドワームの触手が激突する。魔獣が纏う魔力と魔術障壁が干渉し、弾き合う。砲術員は足を踏ん張り、耐えた。触手が遠ざかる。

「格闘戦用意。操舵長、尾鰭を止める。合図したら離脱だ」  
「アイ、艇長<sup>スキッパー</sup>」シアーズは伝声管に向け「機関長、合図したら、ありったけの出力を頼む」「アイ、準備万端、整つとります」そしてキャニングを、伝令として艇首へ向かわせた。

「闘術員、格闘戦用意！ 砲術員、闘術員の後方で援護！」ランドール少尉が命令する。闘術班にも所属する四名が前衛、残りの砲術員六名が後衛という隊型で集合した。射撃だけでは、肉薄された場合、魔獣に押し切られ艇が損傷する危険がある。

前衛の、人族のイアン・ストークス水兵長、ジョン・ベケット一等水兵、獣人族のアンガス・バーンおよびゼッド・ウォーティガン一等水兵は防盾を束ね、修理班員のピアース・サビーン二等水兵に渡した。

後衛の、人族であるヒュー・ライノット、ジョン・スピライン、ダミアン・ヘイ、ロディ・タナー、ハリー・ゲリン、ジェイ・ダフの六名の二等水兵たちは戦闘用ロッドを構え直した。アンガスとゼッドが半獣人化し、身構えた。

迫る触手を睨み据えながら、ランドール少尉の命令をチエルディツチ兵曹が号令する。「後衛、十秒間射撃、開始！ 前衛、身体強化！……射撃中止！ 前衛、前進！」頭部を攻撃され勢いの削がれたスクイドワームの触手が、甲板に侵入する。

正面から振り下ろされた触手の衝撃を、灰色熊人は腕を交差させて受けた。筋肉が膨れ上がり震え、歯を食いしばり耐えた。踏ん張った足をバネにして押し返し、巨大な掌と爪で抉り、弾き返す。隣では黒狼人が、鋭い牙でコイル状の外肢の先端を噛みちぎっている。ベケットは拳を魔力障壁で包み籠手状にし、蠢く触手を殴りつけている。魔獣の魔力と干渉した反発力が打撃となり、触手の体組織を破壊し押し返す。ストークス水兵長は斜に構えて一気に触手に蹴り寄り、体を右にずらしながら左手で触手をいなす。右手に刃状の魔力籠手を発動し、掬い上げるように斬りつける。傷つき、更に叩き付けてくる触手を体を開いて躲し刃を下に、円を描くように走らせ切り裂く。右方向から襲い来る別の触手を、ストークスはするりと半身で躲した。

飛び散る魔獣の血液や肉片で足が滑り、避けるのが間に合わず触

手に跳ね飛ばされる者がいても、肉体強化の効果で衝撃は弱められ打撲や擦り傷で済み、再び戦列に加わる。

「前衛、後退！ 十秒間射撃、開始！」命令で闘術員が下がり、爆炎が魔獣の頭部を包む。射撃が中止され、闘術員がまた前が出る。それが三度、繰り返された。

シアーズは戦況を見守りながら、額の汗を拭うのを我慢した。少しでも不安を感じているように見られる訳には、いかない。部下の集中力を、乱してしまふ。平静の仮面のもと脳裏の片隅で、現在の状況を招いた自分の選択を悔やむ。艇を危機に陥れたのは自分の采配のまずさか、最近の阻止行動の順調さに慢心があったのか。一瞬、奥歯を噛み締め、背で組んだ腕の、汗まみれの手の平を拭いそうになった。いや、今はそんな事を考えている場合ではない。後悔や分析は、後でいい。皆の命は、タイミングを計る俺の、一瞬の判断力にかかっているのだ。

艇首から尾の動きを冷静に観察し、攻撃点が確認できる瞬間を待っていたウセディグ大尉は氷精アイス・アローの矢を、魔獣の尾近くの体節の隙間を狙撃した。咆哮と共に、神経に刺さった氷の矢に尾が硬直する。スクイドワームは上半身を仰け反らせ咆哮し、海面の騒擾が治まった。

「今だ！」「アイ、全力発進！」シアーズの合図と同時に、一気に艇が驀進する。機関室では魔導ケトルが唸りを上げ、ギルダンが出力桿に魔力を流し込みながら魔石を睨み、ターロックが配管や圧力計のチェックに飛び回っていた。通常は緊急速度が出力の上限となっているが、今は機関の限界一杯の出力を絞り出している。長時間続ければ故障の可能性が跳ね上がったたり、後でオーバーホールが必要になったりする。最悪の場合は、魔導ケトルが割れるか運転の最中に魔石が崩壊しきってしまう危険がある。「ばあさんよ、保もって

くれよ！」呟いたギルダンは、『鍛冶の神ゴウーニユ』に加護を願った。

H・M・S・フラウンダーは、魔獣の左方向に抜けようとひた奔る。十分な距離がとれると、第一戦速へと速度を落とした。ほつとする間もなく、「操舵長、後方へ回り込む用意だ。少尉、砲術班を再編成して、体側の鰭を集中攻撃する。あれだけ傷ついていれば、反撃も少ないだろう。愚図愚図していると、あの二頭が抱きついてくるからな。ハーレムのお誘いはありがたいが、体力が保たんから遠慮したい」無理矢理放った品のない冗談に、艦橋の誰かが調子の外れたような笑い声を上げた。

艇は面舵で旋回し、スクイドワームの横を尾鰭の方向に進む。決して、触手の攻撃範囲には入らない。

「左舷列、射撃開始！」魔獣の体側に沿って、尾鰭に向かい真紅の射線が突き刺さる。櫂状の鰭が裂け、砕け飛び散っていく。尾の神経を麻痺させられ、触手の大部分を失い傷ついたスクイドワームは、反撃を封じられ身を振っている。推進力を失えば、最後に残された体当たりの手段をも奪うことができ、麻痺から覚めて動き始めた二頭の中型スクイドワームにも、余裕をもって対処できる。その身に集中攻撃を受ける大型魔獣を中心に、噴き出す血液により紫に染まった海面が広がっている。

尾の先を通り過ぎると、二頭の中型魔獣が艇に向かい動き始める姿が見えた。

「操舵長、反転して、大型の左側を頭部方向に。少尉、右舷列は中型を、左舷列は引き続き大型の鰭を狙え。……よし、行こう。操舵長、中型に波を喰らわせてやれ」

「アイ、サー！」オベド一等兵曹はニヤリと笑い最大戦速に上げ、大型魔獣の横を中型目指して進む。

「全員、慣性に備えろ！」



この戦闘では軌道を描いて方向転換するより高速で旋回できるので、常に回頭点で速度を落とし、最小の半径で旋回できるベツカーラーの特性を生かした直線機動を行っていた。しかし今回は、中型魔獣にまっすぐ突っ込んでいき、直前で大きく面舵をとった。艇体が横滑りし、衝撃波で大きな浪が立った。その圧力を二頭の魔獣に叩き付け、よろめかせる。「起立、構え！」膝をついていた砲術員が立ち上がり、瞬時に構えた。第二戦速に落とした艇が大型魔獣と中型魔獣の間をすり抜けながら「射撃、開始！」、両舷からドラッグ・トレーサーが雨霰のように、それぞれの標的に降り注いだ。

大型のスクイドワームは、触手をもがれ鱗を失い満身創痍で、もはや死に体の姿をさらし、周囲を自分の体から流れ出す紫に染めてわずかに身じろぎをしている。中型の方も傷を負い、怒りを込めた勢いで再び動き出す。

大型魔獣の頭部を過ぎたフラウンダーは、攻撃力を失った敵から脅威判定を外し中型スクイドワームへと目標を変えた。一旦体勢を整えるため、取舵で中型の背後へ回り込む進路をとる。艇首のキャニング候補生が、崇拜するような眼でシアーズを見詰めていた。ああ、やめてくれ、俺をどうしようというんだ……。

「砲術班に、もうひと仕事だ。消耗の少ない人員を左舷に集めて……」とシアーズが言いかけた時、艇の動きを追っていた中型魔獣のセンサーがぶるりと震えた。触手がうねうねとうねり、紫の海面に引き寄せられていく。

二頭の触手は、波間に漂う大型スクイドワームの胴体に伸びていく。傷を探り当てると、粘着質の湿った音をたてながら潜り込んでいく。大型魔獣は苦鳴を上げるが、触手は構わずにブチブチという音と共に身を引き裂いていく。二頭の触手はたちまち紫の血に塗れ、<sup>まみ</sup>狂奔を始める。

コイル状の外肢は肉を抉り、口に運んでいく。獲物に成り下がっ

た者の咆哮と、餌にありついた捕食者の唸りが海上に響き渡る。艇上は、沈黙に包まれていた。

「本能より食欲が勝ったのだ。この間に消耗した魔力を回復できる」  
ウセディグ副長が、吐きそうな青い顔で魔獣の狂宴を見ているキャニングに告げた。

「本能ですか？」  
「まただ。僕は、質問してばかりだ。何も知らないんだと、唇を噛んだ。」

「いきなりこの艇を襲ってきたきたのは、『メールシュトロームの魔石』に惹かれての事だ。あの魔獣は、間違いなくクラークンの棲処に巢食う、海棲動物が魔獣化したものだ。魔力を纏っていただけで、属性攻撃をしてこなかったのが、証拠だ」

シアーズは操舵室で、大型スクイドワームの断末魔と、群れのリーダーだった海魔を貪り喰う中型スクイドワームを見詰めていた。

「メールシュトロームの魔石」は、モスケネス海の底に棲むクラークンの魔力が、少しずつ漏れ出して海底の岩に蓄積されたものだ。その魔力で魔獣に変化した海棲生物が、故郷の波動を感じとり惹かれてきた。

だから北の海魔は魔石機関を搭載する船を、軍艦を、軍港を、漁港を襲う。守るためには、軍艦のために魔石が要る。魔石があるから、魔獣が来る。それは血を吐きながら続ける悲しいマラソンのようだ。海魔の襲来の理由は、公表されていない。大規模な漁法に従事する者がいなくなり、魔石利用反対の機運でも高まれば、軍事力の低下を招くからだ。『メールシュトロームの魔石』と魔石機関は大変有用な技術なので、国益や国防のためにも使用をやめる事はできないのだ。この海に向こうに、油断のならないあの国がある限り、何も知らなかったあの頃は、ただ海魔を憎んでいた……。

「艇長、紅茶をどうぞ」  
いつの間にか考えに没頭していて、ハイワード一等准尉がマグカップを差し出しているのにも気づかなかった。戦闘配置中で、厨房は閉まっているのだが。怪訝に思うも飲もうと

すると、ラム酒のきつい臭いが鼻を刺激した。「作戦行動中ですが、まあ、いろいろ考え込むより勢いはつきます」と微かに笑う信号長。感謝の笑みを浮かべマグを飲み干すと、食道をカツと灼いて胃に落ちていった。ともかく、今は仕事を片付けるのが先だ。

「操舵長、取舵で回り込む。少尉、砲術班の準備を。候補生を……ああ、いたか。副長に氷魔術で援護をするよう伝えてくれ。……さあ、行くか」パン！と、手を鳴らす。

「とーりかーじ、よーそろー」オベド操舵長は、舵輪を回した。

**第002話 戦闘（後書き）**

情勢と乗員の紹介回の後編でした。

次回、『第003話 交替』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8400x/>

---

ネレイシス戦記「名誉のためでなく」

2011年10月29日03時15分発行